

今年イチ押しの映画

校 長 武井 正明

あっというまの3時間だった。

とにかく歌舞伎のシーンが圧巻だった。吉沢亮と「べらぼう」で毎週見ている横浜流星、この才能あふれる若手俳優ふたりが、わずか1年半で歌舞伎をマスターした。吉沢亮の女形のしぐさなど、まさに女性のそれだった。曽根崎心中の場面は、泣けて仕方がなかった。

任侠一家に生まれた喜久雄（吉沢亮）は十五の時に抗争で父親を亡くし、天涯孤独となる。喜久雄の才能を見抜いた歌舞伎の名手、花井半二郎（渡辺謙）は彼を引き取り、歌舞伎界へ引き込む。喜久雄は半二郎の跡取り息子・俊介（横浜流星）と兄弟の如く、親友・ライバルとして互いに芸を磨き青春を謳歌する。そんなある日、事故入院した半二郎は、自身の代役に俊介ではなく、喜久雄を指名する苦渋の決断をする。血ではなく才能を取ったのだ。そこから、ふたりの運命は大きく揺れ動いていく…。

私があんまり勧めるものだから、東京の私立高校で国語教師をしている、居眠りが得意な親友が、昨日『国宝』を見た。

…文句ナシの面白さ！全然眠くならなかった。久しぶりに劇場まで出かけた甲斐があったよ。ありがとう。

…これは俺たちが、五十年も昔に大好きだった梶原一騎だよ。俺は途中から星飛雄馬や伴宙太や星一徹や矢吹丈やマンモスや葉子たちのことが思い出されて、泣けてきた。

変かね？

と、観た直後に感想が送られてきた。

全然変じゃない。鋭い考察だ。

罵詈雑言や暴力、やることなすこと無茶苦茶なのだが、登場人物は皆それぞれに、熱く一途に信じるものをもっていて、それを極めるために無傷ではいられず、必ず大切な何かを、大事な仲間を捨てねば上にあがれない。そして、互いにはないもの（家柄、才能）に嫉妬し、渴望し、何度も絶望の淵から這い上がって死力を尽くす。遂に頂上に立った時、彼にしか見えぬ、いつしか眼に焼き付いた、記憶の底の、花びら舞う美しい景色が広がる…。

それは確かに梶原一騎が描いた、スポ根ものの世界観と悉く重なってくる。

私は流星が演じた、強くなれず挫折し、堕ちていく男の弱さに惹かれてしまう…。

なんとも美しい映画です。

なんとも切ない映画です。

芸術とは、こんなにも苦しく、残酷なものなのでしょうか。

もう観たくないです。

もう一回観たいです。